

	<p>2012年 3月15日 第89号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	--

カマキリの卵(卵のう)

バッタ広場は冬枯れ。ますます増えてきたアズマネザサだけ青々としています。

2月18日、ここにどのくらいの数のカマキリの卵(卵のう)があるか調査しました。5人で1時間ほどかけてカマキリの卵のある枝や枯れ草に赤いリボンをつけ、後でリボンの数を数えました。オオカマキリの卵43個、ハラビロカマキリの卵2個、コカマキリ(?)の卵1個。「最近カマキリが少なくなった」と思っていたので、卵の数が多いのにびっくりです。

葉が茂っていたときは目立たなかった卵も、枯れて枝や茎だけになると目につきます。オギやチカラシバなど枯れ草が倒れてくしゃくしゃになった中にもあると思いますが、くしゃくしゃの中は確認していないし、見落としたものもあるので、実際の数はずっと多く60個以上はあったと思われます。とにかく多いのです。

カマキリの卵の見分け方

オオカマキリの卵：マシュマロのようにコロンとしている。

チョウセンカマキリの卵：細長く縦に凹凸がある

ハラビロカマキリの卵：緑褐色。はっきりしない白い筋がある

コカマキリ：縦に白い筋がある。表面に凹凸がない。



右は小さいが、両方ともオオカマキリの卵。産んでから時間がたつと色が濃くなる



左：ハラビロカマキリの卵 右：バッタ広場の杭にあった卵。泥で汚れている。コカマキリかハラビロカマキリか？低い杭にあったのでコカマキリかも

バッタ広場の木や草の丈を70cmに切りつめてしまったので、カマキリの卵も地面から20cm位の低いところに多く(以前は70cm~1m位のところに卵があったように思います)枝先にはありません。カマキリも考えて目立たないところに産卵しているのでしょうか。またバッタ広場は2011年2月に更地になり、木も草も全部処分されたので、卵はよそからやってきたカマキリが産んだこととなります。

バッタ広場でよく見かけたのはオオカマキリとハラビロカマキリです。8月にカマキリ・バッタ類の調査をしたとき、オオカマキリが2匹、オオカマキリの幼虫が5匹、ハラビロカマキリの幼虫が2匹いました。またこのとき、カマキリの餌になるバッタやイナゴなどが79匹確認したので、カマキリには餌がいっぱいあるおいしい環境なのでしょう。

板橋区昆虫類実態調査 報告書によると、板橋区には、オオカマキリ、チョウセンカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリの4種がいるそうですが、チョウセンカマキリは畑地・河川敷など開放的な広い草地を好み、荒川河川敷でのみ確認されています。

卵の数が多いのに驚きましたが、カマキリは何度も産卵するらしいので、卵の数=カマキリの雌の数とはならず、個体数の調査とはなりません。形はオオカマキリの卵でも、別の種類かと思えるほどの小さなものいくつかありましたが、オオカマキリの末っ子なのかもしれません。

一つの卵(卵のう)のなかに、卵が200~300個位入っているそうです。それが46個もあれば、すごい数のカマキリが生まれることとなりますが、自然界はそうはいかない。葉が枯れ落ちて丸見えになった卵は野鳥に見つかって食べられ、子ども達が見つけて持ちかえり、枯れ草の卵は踏みつけられ潰され(私達も知らず知らずに踏みつけ)春まで持ちこたえられる卵のうは、かなり少なくなるでしょう。バッタ広場も、私達が刈り込んでいるためスカスカしています。プッシュ状だった頃より外敵に見つかりやすいでしょうね。



そして春、卵からかえったカマキリがぞろぞろ出てきます。小さな命に感動します。成虫と同じ格好ですが、5 mmほどの「吹けば飛ぶような」子供のカマキリです。卵から孵ったばかりの幼虫でも肉食なのでアブラムシなど小さな昆虫等を食べるのですが、頼りない小さな幼虫が自力で餌をとり、生き延びて一人前のカマキリに成長するのです。本当にえらい、と感心します。

200匹孵ったとしてもほとんどは他の生き物の餌になったり、餌がとれなくて飢え死にしたりして、成虫になれるのは1、2匹位なのでしょうね。



6月頃はまだ弱々しいカマキリ（写真上）も、夏から秋になるといかにも強そうになり、大きなバッタ等を食べているところを見かけます。ノコギリのようなカマで獲物を押さえ込んでいく姿は迫力があります（写真中・下）。

そして秋になると栄養をつけて大きなお腹をしたカマキリが卵を産み、死んでいきます。カマキリの一生は波瀾万丈です。

そういうわけで、バッタ広場のカマキリの卵、やさしく見守っててくださいね。

（坂本 郁子）



写真上：カマキリの幼虫（2010年6月）

写真中：カメムシを捕まえたハラビロカマキリ（2009年9月）

写真下：イナゴをカマで押さえ込んでいるハラビロカマキリ（2008年10月）

トンボ池のカエルたちと梅まつり

今年はいつまでも寒い日が続きました。3月3日(土) 4日(日) 梅の花がほとんど蕾のまままで梅まつりが開催されました。3日は春らしい陽射しを感じましたが、4日は真冬のような寒い曇り空。それでも両日とも会場にはたくさんのお客さんが見えました。

梅まつりには2000年から毎年参加してきました。ピオトープ池を理解してもらうこと、赤塚城址周辺の自然を紹介することが主な目的です。この時期、冬眠から覚めたヒキガエルが池に来て卵を産むので、彼らがピオトープ池の最大の見せ場になります。これまでカエルが来なかった年もあったので、この寒さではカエルは冬眠中だろうとあきらめていたのですが、たくさん来てくれました。よかったです。

寒いのでじっとしているな、と思ったら、1匹が抱きつくくと、数匹がやってきて抱きついたり、振り落とされたりして急に賑やかになります。



メスのカエルに飛びついたオス



池のそばで毎年やっている剪定枝や竹を使った工作はとても人気があります。枝を輪切りにして、絵を描いてもらい、金具とリボンをつけてペンダントにするのですが、毎年作る子ども達も結構いるようです。子ども達は寒い中丁寧に時間をかけて絵を描きます。「最初は何を描いたかわからなかったけど、年々絵がうまくなる。今年は去年よりうまい」とお父さんにほめられたり、「つくったペンダントは1年間大事にしているよ」と言われたりすると私達もうれしい。今年はペンダントづくりに200人が参加、他に竹林の地主さんからいただいた竹で、鉛筆立てや花入れづくりもにぎわいました。

また切った竹の竹楽器も楽しめました。清水さんがもってきた檜の枝をパチにして、節を抜いた竹をたたくと高さによって異なる音程になりガムランのような音色の楽器になります(坂本郁子)。

竹は太くても早く切れるので、女性も花入れに自分で切っていく。





自分で（お父さんや会のおじさんに手伝ってもらって）輪切りにした枝に、色をぬり、絵を描いて、それに金具をつけて好きな色のリボンを通すとペンダント（メダル）のできあがり。



写真左：竹にも絵を描いてオリジナル鉛筆立てに。

写真右：高さの違う竹をたたくとおもしろい竹楽器。

板橋区のカマキリ（補足）

カマキリ類は熱帯に主に分布する昆虫で、九州本土以北ではヒメカマキリ、ヒナカマキリ、オオカマキリ、チョウセンカマキリ、ウスバカマキリ、コカマキリ、ハラビロカマキリの7種類と少ない。東京都では全7種類が記録されている。珍しい例である。熱帯系昆虫の通常のパターンだと九州で最も種類数が多く、北上するほど少なくなる。ゴキブリ類はその典型である。カマキリも北海道まで行けばたった2種類（オオ、ウスバ）になってしまう。東京付近でも標高が1000mぐらいになるとオオカマキリ1種のみになり、しかも個体数は少ないようだ。

板橋区ではオオ、チョウセン、ウスバ、コ、ハラビロの5種、ウスバ以外の4種は区内各地で見られる。ウスバカマキリは関東地方では稀な種のように、東京都の記録は1990年に赤塚公園徳丸が丘地区で採集された1例のみで追加記録は無い（東京都本土部昆虫目録）。ヒメ、ヒナの2種は東京付近では沿海部の記録が多いが、内陸部には少ないようで埼玉県では未記録、板橋区で発見される可能性は低いけどゼロではない。

最も広い範囲に生息するのがコカマキリで加賀公園にも生息する。オオ、ハラビロも各地で見られるが、南部の板橋地域では見つからない。遠方から飛んできたものがたまに見つかるぐらい

である。チョウセンカマキリは西台で記録しているが、荒川河川敷以外では少ないようだ。

生息地毎にこの4種の種類構成、個体数の比率を調べれば大変面白であろう。ただしこの4種とも深い森林に住む昆虫ではなく、林縁から草原、農耕地に住む昆虫であり、森林の自然度を指標するタイプの昆虫ではない。コカマキリはやや小型、チョウセンカマキリはより開放的環境を好む傾向がある、などの差異はあるが、4種とも生態的な地位は非常に近いように思われる。餌の好みが生種によって差があれば面白いのだが、確認する作業は大変そうだ。松良俊明氏が何か書いていたと思ったが、本が見つからず判らない。

良い環境には生態的な地位に近い昆虫が何種類も生息し、環境が悪化するにつれ段々とその種数が少なくなる。昆虫にはこのようなケースが多い。いなくなる種の順番は地域によっておおよそ決まっている。生態的な地位が微妙に違っている証拠であろう。板橋でもカマキリやセミ、ピロウドコガネ類、クロコガネ類を使って調べれば面白そうだ。

釣巻岳人

板橋区荒川河川敷の3.11

荒川流路沿いの地割れ
右上は生態園少し上流 2012.2.12 撮影 1年近く経っているが裂け目は風化していない、新たに出来た？ 左下は新河岸3丁目 2011.3.19 撮影



荒川河川敷の液状化 左上・右下共陸上競技場
2011.3.19 撮影 噴出した跡がー列に並んでいる



2011年3月11日の地震で出来た地割れと液状化跡である。液状化は戸田橋と生態園の間でも見られたが、陸上競技場の方が大きかった。脇の水路まで砂が流れ込んでいた。地割れは流路に近接して多く発生していた。直下型の大地震がきたらどうなるのであろうか。 釣巻岳人

活動・観察記録(1月～2月)

1月14日(土) 赤塚トンボ池の泥さらえ(1回目)

1月21日(土) 赤塚トンボ池の泥さらえ(2回目)

1月28日(土) 赤塚トンボ池の泥さらえ、湧水水路の泥さらえ(3回目)

1999年に池が出来てから13年が経ち、湧水量が少なく、水が入れ替わりにくいため池底に堆積した落ち葉等がヘドロとなり、水質が悪化、毎年プランクトン(アオコ)が発生します。そこで今年はじめて泥さらえに取り組みました。11月末に、湧水の流入をストップ。雨がほとんど降らなかったため、水が減るのも早かったが、ヘドロの除去は楽ではなかった。どういう訳か、ザリガニは池にも水路にも1匹も見あたらず、ザリガニの巣穴もなかった。21日、干上がり寸前の池にコイ大小5匹、鯰(特大)1が死んで浮いているのを発見した。弱い雨でまた池面積が若干広がった。28日、湧水水路清掃、池の水は見苦しくない程度にたまっている。池際のヌルデ、ヤナギを切って、梅まつりの材料に充てる。3日とも本当に寒い中での作業だった。



写真左：水位が下がったら死んだコイ、ナマズが出てきた(全部で6匹)

写真右：湧水水路の清掃。雨が少なかったため湧水量も減っていると思われる。落ち葉がたまって湧水が流れない。

2月4日(土) 5日(日) 環境なんでも見本市に出展



今年は、植物が子孫を残す工夫を、木の種で紹介した。風によって遠くまで飛ぶケヤキ、アオギリ、カエデ、イヌシデの種や、野鳥に遠くに運んでもらうエノキやマンリョウを展示。また山田さんがつくったカエデや、シナノキ、ラワンなどの種の模型を飛ばして楽しめた。風のない室内なので本物の種は飛ばないので、模型は好評だった。

3月3日(土) 4日(日) 梅まつり出展

活動のお知らせ

運営委員会：3月24日(土) 12:30～13:30

作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。**来年度の活動計画案をまとめますので、雨天でもご参加下さい。**

連絡先；坂本(090-4618-1295)

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月19日(土) 12:30～

問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで

赤塚ピオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

飲み物、軍手、タオル、汚れてもよい服装。カメラ、ルーペ、双眼鏡、図鑑等があると楽しい

3月24日(土) 10:00～12:00 バッタ広場柵作り(雨天の場合は4月21日)

4月21日(土) 10:00～12:00 バッタ広場柵作り(ロープで仕上げる)(雨天の場合は4月28日に延期)

4月28日(土) 10:00～12:00 バッタ広場柵作りまたはササ刈

5月19日(土) 10:00～12:00 バッタ広場ササ刈等

集合場所：いずれも赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

日暮台公園樹林地観察会(原則として第1土曜日)(樹林地内の推移と林縁植物を観察)

4月 7日(土) 10:00～11:00 日暮台公園前集合

5月 5日(土) 10:00～11:00 日暮台公園前集合

総会のお知らせ

25回目の総会になります。会費の納入もよろしくお願いします。

4月28日(土) 13:00～15:00

場所：赤塚5丁目集会所(赤塚5-16-33 赤塚いこいの家2階)

場所がわからないときはお電話下さい。

ピオトープ管理のボランティア大歓迎

生き物のすめる草地(バッタ広場)などの管理作業を応援していただけませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)